

ちばの里山 LIFE 体験交流事業実施報告書 (1)

主催：千葉県

企画運営：NPO 法人ちば里山センター

協力：林業女子会@東京

題 名	森活を楽しもう①「自然とともにある暮らし」
日 時	平成 28 年 11 月 23 日 (水・祝日) 13:00~15:00
会 場	東京・大手町 カイテキカフェ
出席者	受講生 46 名 スタッフ 11 名 (ちば里山センター 6 名、林業女子会@東京 5 名) 講師 1 名、千葉県森林課 1 名
内 容	13:00~14:30 講演「自然とともにある暮らし」 NPO 法人「共存の森ネットワーク」理事長 澁澤 寿一 14:30~15:00 質疑応答・林業女子会概要説明
報 告	講演「自然とともにある暮らし」 NPO 法人「共存の森ネットワーク」澁澤寿一理事長 共存の森ネットワークは毎年 100 人の高校生が森や海、川の名人を訪ねて知恵や技術、ものの考え方を「聞き書き」し、記録する活動を行っている。澁澤氏はそこに登場する古老への「聞き書き」から、人々と暮らしが自然とともにあった頃の生活の知恵を紹介した。 縄文時代から江戸時代まで、この国の人々は自分で作ったものを消費し、生活してきた。自然の恵みをもたらす地球の恩恵をどれだけ受けてきたか？戦後、自然という元手に開発という名のもとに手を付け、古老がこのままで大丈夫かと不安を抱いている姿が浮き彫りになった。 昭和 30~35 年、高度経済成長はサラリーマン家庭に自家用車をもたらし、農業分野ではトラクター、コンバイン、林業でもチェーンソー、刈払機など機械化の波が押し寄せた。こうして、人々とともにあった生活の知恵は萎み始めた。 経済分野では金融マーケットが拡大し、1990 年代以降グローバル経済、実体経済の 70~100 倍にもなるバーチャルマネーが動き、経済活動の足かせになり始めている。モノヅクリが境目を迎えていると澁澤氏は警鐘を鳴らす。 お金の替えられないものは価値がないとされ、東日本大震災で被害を受けた東北地方のある町が復興の名のもとに「まつり」を再興しようと地元自治体に掛け合ったが、費用対効果という理由付けで、予算化できず敗退した。 林業で生計を立てる秋田県のある村では、江戸時代の飢饉から現在まで、餓死者を一人も出したことがないという。皆伐した山から、翌年ワラビが生え食糧にすることができ、飢饉で米がとれない年も山の栗で食いつなぐことができた。生きるすべてを山から調達してきた。だから餓死者が一人も出なかったという。 山の生活ではワラビを採るエリア、時期、薪を採るエリアなど、山のオキテがあった。こうして、ものの考え方も同時に作ってきた。 大都市は川を下った港にある。山のある生活とは異なるサイクルが回っている。山の生活では煩わしい人間関係がある反面で、困ったときに助け合うというありがたさがある。この煩わしさを取り外そうとして、戦後の 50 年で人と人の無縁社会を作り上げてきた。そこから抜け出すことがすべての始まりではないか。

人間は共感できる動物だから、人と人の関係性の中に役割を見つける、その場が里山だと思う。この 50 年で人と人の関係性を断ち切ってきたが、やさしさ、慈しみが当たり前になる社会を作ることが大事だと思う。

里山では命がつながり続けることをやってほしい。野菜もネットで買える時代だが、生産者との見える関係を作ってほしい。野菜以外の洋服でも命がつながっていることが実感できるやり方があるはずだ。

質疑応答の時間では、「林業に女子が参加することについて」洪澤氏は、「林業だけが林業ではない、キノコ採りに始まり作業は山のようにある」として、林業イコール力仕事の概念を取り払う転換をすべきと勧めた。

講演に続いて、林業女子会について@東京の糸川結花さんが報告した。2010年に京都大学の学生を中心に林業女子会@京都が発足し、全国に18の女子会が活動している。@東京は2011年に設立し、メンバーは10代から50代の社会人が主体で活動は毎回10人から20人が参加する。奇数月第二土曜日を森づくり活動に充て、千葉県市原市の森をフィールドにしている。作業は植林、下草刈り、竹林整備、遊歩道整備などを行っている。偶数月第二土曜日に行う定例会では活動計画の検討、体制作り、木工クラフトのワークショップなどを行っている。自分たちが楽しいと思う活動をすることに尽きると活動への参加を呼び掛けた。

添付資料（写真）



カフェの雰囲気参加者を和ませる



澁澤寿一氏



受付



スライドに見入る参加者



水路に蓋をしない堰



参加者からの質問も



参加者から相次いで質問が



参加者からは具体的な質問も



@東京 糸川結花さ